事務局使用欄

一般用漢方製剤平成24年追加31処方の出典とその記載内容について

（帝京大薬）○木下　武司

【目的】2012年4月9日に一般用漢方製剤31方の追加が公示され、総計294方となった。わが国では、伝統的に古方派漢方の影響が強く、『傷寒論』・『金匱要略』などの古医方を出典とする処方が多いのであるが、2010年以降の追加処方の中には旧210方にはごく少数であった近世の中国医学の処方（杞菊地黄丸など）が散見されるのが特徴である。一方、本年度追加処方31方の内訳をみると、傷寒論や外台秘要など唐宋古医学を出典とする処方が18方と過半数を占め、金元以降の医学書に由来するものは8方にすぎないが、割合としては約4分の1であって意外と高いことがわかる。残りの4方はいわゆる本朝経験方に分類される邦人漢方医の創製した処方である。

一般に、『傷寒論』や『金匱要略』などに収載される古方は江戸時代から繁用される処方であり、各処方の主治などについて文献学的検討は十分になされているのであるが、そのほかは十分に承知されているとはいい難い。次の14方について、直接、原典を参照し、主治に関する記述内容の検討を行ったので報告する。

【結果・考察】『傷寒論』や『金匱要略』などに収載される古方は江戸時代から繁用される処方であり、各処方の主治などについて文献学的検討は十分になされているのであるが、そのほかは十分に承知されているとはいい難い。そこで直接、原典を参照し、主治に関する記述内容の検討を行うこととした。本研究で実際に検討対象としたのは次の14方である。

奔豚湯（晋・葛洪撰・梁・陶弘景増補『肘後百一方』、5～6世紀）、外台四物湯加味（唐・王燾『外臺祕要』、752年）、神仙太乙膏、大防風湯（以上、『太平惠民和劑局方』、1151年成立）、柴胡枳桔湯（明・錢仁齋『傷寒蘊要』、1504年）、柴梗半夏湯、扶脾生脈散（以上、明・李梴『醫學入門』、1575年）、烏苓通気散、加減涼膈散、洗肝明目湯、喘四君子湯（以上、明・龔廷賢『萬病回春』、1587年）、補陽還五湯（清・王清任『医林改錯』、1830年）、八味疝気方（福井楓亭『方讀辨解』、18世紀）、柴葛解肌湯（浅田宗伯『勿誤藥室方函』、1876年）

以上のうち、奔豚湯は追加31方に『金匱要略』（後漢・張仲景『金匱要略』、2～3世紀）出典の処方も含まれているので、併せて検討した。外台四物湯加味は外台四物湯を祖方とした加減方であるので、『外臺祕要』を原典とした。加減涼膈散も浅田宗伯家方とする同名の処方が追加31方に含まれているので『勿誤藥室方函』（1876年）も検討対象とした。